

近松門左衛門が生まれ育ったまちさばえ

新

近松 もののがたり



# 近松門左衛門と「近松の里 たちまち」

近松門左衛門（本名・杉森信盛）すぎもりのぶもりが生まれ育った、「近松の里たちまち」。古い面影を残す城下町には、かつて栄えた活気ある土地の記憶があります。由緒ある神社には、日々の喧騒けんそうを忘れさせる神聖な空気が流れています。豊かな自然や草花には、心身をやさしく癒いやしてくれる力があります。

この地は正保二年（1645年）から29年間、徳川家康のひ孫にあたる松平昌親公まつだいらまさちかを藩主とする吉江藩がありました。近松の父、杉森信義のぶよしは福井藩士として仕えていましたが、藩主昌親のお付きの人に任命され吉江の地に移つきました。そして、この地で信盛（近松門左衛門）が誕生しました。

今も吉江藩のあつた「近松の里 たちまち」には風情を残す吉江七曲り通りや春慶寺、福正寺、西光寺、そして近松門左衛門の文学碑などがあります。現在は当時の佇まいを見るることはでたたずて、この地で信盛（近松門左衛門）が誕生しました。

江戸時代を代表する文豪

## 近松 門左衛門

人形浄瑠璃や歌舞伎のすぐれた作品を数多く残した近松門左衛門（1653～1724）は鯖江で生まれ、多感な少年時代、人間形成の大切な時間を同地で過ごしています。義理人情に悩む人間らしい姿を描き出す近松文学の土台は、鯖江の豊かな自然と人情、風情にはぐくまれたと言えるでしょう。人間の悲しさや愚かさ、やさしさを描いたその作品は現在も愛され続けています。



公益財団法人 柿衞文庫蔵

きませんが、今も変わらない地割りや道路から吉江藩の様子を伺い知ることができます。

実は近松は当初、福井市生まれと考えられていました。しかし、昌親公が入部する前の—1654年に吉江藩家臣が作成した関所への通行許可願の発見と、昌親の叔母おばが嫁いだ西光寺の文書等の内容から、近松が生まれる一年前には家臣団が吉江に住み、藩政に当たっていたことが分かりました。家臣団だった信義とその家族も同じく入部していました。このお話は、新しく発見された事実も踏まえながら、ふるさとさばえて生まれ育った近松少年を夢見た「ものがたり」です。



松平昌親公肖像画(瑞源寺蔵)



池泉広場の蓮池



西光寺の表門(吉江藩表門を移築)



おとく

昌親公の叔母。  
京都より西光寺に嫁いだ。



杉森 信義

近松の父。吉江藩士。  
吉江藩主・松平昌親公の付人。



次郎吉

近松門左衛門の幼名。  
本名は杉森信盛。

本文中の歳は満年齢で記載

## 主な登場人物

江戸時代の初めのころ、今の鯖江市・立待地区の一部にあたる吉江の里に、新しい殿様<sup>どのさま</sup>がやってくることになりました。

殿様となつたのは、福松<sup>わかざみ</sup>という若君<sup>わかなづみ</sup>、のちの松平<sup>まつだいら</sup>昌親<sup>まさちか</sup>です。

その時代、殿様が治める土地を「藩」<sup>はん</sup>と呼びました。吉江の里はもともと福井藩の一部でしたが、福松が五さいのころ、福井藩の殿様である父の松平忠昌<sup>ただまさ</sup>が亡くなりました。そこで、兄の万千代<sup>まんちよ</sup>が福井藩をつぎ、もう一人の兄の千菊<sup>せんぎく</sup>と末っ子の福松は、それぞれ松岡と吉江に小さな藩を作ることになったのです。しかし、まだ幼かつた福松は、母や妹とともに江戸へ向かい、十年近く江戸で暮らしていました。

そのころ吉江には、西光寺<sup>さいこうじ</sup>や春慶寺<sup>しゅんけいじ</sup>(心慶寺)などの大きなお寺がありましたが、そのほかには農家が建つてているだけの小さな村でした。そこに藩を置くことが決まって以来、昌親の家来たちは、吉江に移り住み、町づくりと、藩を治める仕事に取りかかりました。

福松は十一さいになつた年の暮れに、元服<sup>げんぶく</sup>の儀式<sup>ぎしき</sup>を終え、ようや



く大人の仲間入りをしました。その知らせが、江戸から吉江の町に届いたのは、年も明けたころでした。

「江口どの、若君の元服、まことにおめでたいの。」藩の中でも身分の高い家来、杉森信義が言うと、「吉江藩の城下町ができる日も近いですな。」江口半太夫もうれしそうに答えました。

「西光寺さんは、吉江の鴨池かもいけでつかまえたりつぱな鴨を、お祝いわいの品として江戸までおおくりしたことのこと。」

「さすがは西光寺さんじゃ。」

「若君からは、さつそくお礼の手紙が西光寺さんに届いたそうだ。」

「それはまことに結構。」

2

それからまた一年余りが過ぎ、吉江の里もようやく町らしくなりました。

北に経ヶ嶽きょうがだけをのぞむ野原は、草や木がかられ、そのあとには昌親の住む館やかたがもうかなりできて、そのまわりには、すでに家臣達かしんたちの家が建ち並んでいます。

時は一六五三年、いつもいかにも武士らしく落ち着いている杉森信義が、めずらしくあわてた様子で自宅にかけこんできました。



「喜里、かげんはよいか。」信義は妻の喜里が寝ている部屋の前で、ふすまこしに聞きました。

「だんな様、どうぞお入りください。」その声で信義は部屋に入りました。

「男のお子様ですよ。」と言つて、産婆さんさんばさんが赤ちゃんの顔を信義に見せました。

「どうですか。」と喜里が聞くと、

「市三郎はわしに似ていたが、この子は喜里に似ているようじゃ。」と信義が答えました。

「それではわたくしの父・岡本為竹のように、藩のお医者様にでもなってくれるでしょうか。」

「そうかもしけんな。とにかく良かつた。」

二人は、顔を見あわせて笑わらいあいました。

その日、杉森家に生まれた男の子は、「次郎吉」じろうきちと名づけられました。

3

次郎吉が二さいになつた年の夏、吉江の町に、ようやく昌親が江戸からやってくることになりました。そのころには近くの町から町人達も大ぜい集まり、いろいろな店もできました。



春先の天気の良いある日、次郎吉は母に手を引かれ、「七曲り」と呼ばれる大通りを歩いていました。途中、「喜里様」と声をかけたのは、江口家の美津でした。次郎吉と同じころ生まれた直丸を連れています。

「こんにちは、美津さま。おでかけですか。」

「はい、実家まで……あ、直丸、いけませんよ。」

気がつくと、直丸は、魚売りの桶の中のサバやイカをつかもうとしていました。

「これは売り物ですよ。さわってはいけません。やんちゃ坊で困ります。それにひきかえ次郎吉さんは、お行儀がよくて。」

見ると次郎吉は、通りの反対側で旅のもぐさ売りのにぎやかな口上をじっと見つめていました。



へひくきゅう、きんきゅう、たたりなし、ようじょうやいと、おしゃいと、くすしいらすの、ごちようほう、すつるとおもうて、ただろくせん…。

「次郎吉は、このような物売りの口上が好きで…。夫は、こういうものを見せるのはいやがるのですが…。」と言つて、喜里が苦笑いを浮かべると、美津も苦笑いを返してきました。

4

次郎吉六さいの夏は、毎日かんかん照りの日が続きました。用水の流れもわずかになり、ついに吉江藩と福井藩の村の間で水争あらそいが起こりました。そこで、両方の藩の奉行と村代表とが話し合うことになりました。奉行だった次郎吉の父は、朝早く福井の町に出かけていきました。

「母上、父上は、いつお帰りでしようか。」と、市三郎が聞きました。

「夕方までにはおもどりになるとおられたのだがね。」

「兄上、お地蔵じぞうさまの所まで迎むかえにまいりましょう。」と、次郎吉が言つと、末すえっ子の金三郎きんざぶろうが、すぐに、「きんざも行くう。」と、だだをこねました。

「また、きんざの磁石じしゃくのそばのくぎが始まつた。」

「何なの、次郎吉。磁石のそばのくぎって。」

「磁石のそばにくぎを置おきくとくつつくでしょ。きんざは、いつだつてくつづいてくるんだもの。」

「あなたは、いつもおもしろいことを考えつくな。でも金三郎も連れて行つておやりなさい。」

こうして三人は、村はずれのお地蔵さまの所までやつてきました。けれども父上は、いつこうに姿を見せません。夕焼け空は、だんだん暗くなつてきました。

「きんぞ帰りたい。」と、金三郎が音を上げると、次郎吉も、  
「こわくはないけど、おなかがすいたから帰りたいな。」と、空腹くうふくのせいにして言いました。やれやれとばかりに、市三郎も言いました。

「そうか、お前たちがそう言うのなら仕方しかたがない。帰ることにするか。」

三人は、急ぎ足で回れ右をして、はす池近くの水車小屋の所まで来ました。そこには、じいさまとばあさまが住んでいて、水車を利用して粉こなを引いていました。

夕やみの中で、水車はギイコ、ギイコとぶきみな音をたてています。すると、水車小屋の中から、じいさまとばあさまの声が聞こえできました。

「ばあさま、今夜は、半殺はんごうしにしようかの。」

「いいえ、じいさま、本殺しにいたしましよう。」

「おお、そうじやの、本殺しにするかの。」

三人は、がたがたふるえだしました。



「次、次郎吉、き、きんぎ、かけっこだぞ。」と、市三郎は声をつまらせながらもやつとのことで言うと、第二人をせかしていちもくさんにかけだしました。

ようやく家に着き、母上に水車小屋でのことを話すと、母上は大笑いをしながら、「本殺し」というのは『おもぢ』のことと、『半殺し』というのは『おはぎ』のことなのよ。と言いました。その日の夜おそく帰ってきた父上も、そのことを聞いて、一日のつかれもふつ飛ぶほど大笑いしました。

5

次郎吉は九さいになりました。

吉江の町に、赤とんぼが、舞<sup>ま</sup>い始めた秋の夕方のことです。その日、大谷の池でつりをしていた次郎吉と直丸は、池からの下り道を歩いて家に帰るところでした。地元の人<sup>てっぽう</sup>人が「鉄砲場」とよんでいる広い草原<sup>くさはら</sup>の向こうには、春

慶寺があります。そこに続く道に、ちょうどちんを下げる人が何人も歩いていくのが見えました。

「行ってみよう。」二人はかけ出していきました。

境内けいだいに入ると、かがり火がたかれ、多くの人が集まつていました。その中に、美津の後ろ姿が見えました。

「母上、今日は何かあるの。」と直丸がたずねました。

「あ、直丸も来たのですか。今から、川向こうの西田中村から來た名人が、舞まいの会を開くのです。お前のおじいさまもいっしょに出るのですよ。」

「なぜおじいさまが。」次郎吉がたずねると、

「おじいさまは昔、西田中に近い越智山おちさんのふもとで暮らしたことがあり、そのとき幸若舞こうわかまいを学んだんだって。」と、直丸が自慢げに答えました。

「そうか、これが幸若舞か。」

「次郎吉さん、幸若舞のししようは、将軍しょうぐんさまにもお仕えしていりますよ。」

「それは、すごい。」直丸が言いました。

境内に作られた特別なさじき席に、殿様が現れました。すでに二十歳はたちをこえ、もうすっかり青年の姿です。となりには西光寺のおじょう様とそのご家族が座すわっていました。

「おしょう様といつしょに来たのはだれだろう。」次郎吉はたずねました。

「西光寺のおく様のおとく様ですよ。おとく様は、京の都からおよめに来られたのです。」美津が  
答えました。「なんでも、お殿様のおば様にあたるとか。」

「ふうん。」おば様といつても次郎吉の目にはまだ若い女人のように見えました。

「そもそもこのへいけのいちのたにのかつせん…。」

やがて、二人の舞い手が舞台に立ち、大きく両手を開いた姿で舞い始めました。その中の人が  
直丸のおじいさんの半太夫で、背筋をぴんとのばしたりっぱな姿で立っていました。

「もののあわれをどめしは、しようこくにおんおとうとつねもりのしそく、むかんのたいふあ  
つもりにて、さらにあわれをどめたり。」

「前に出たり、後ろに下がつたりしているだけで、つまらないや。」と直丸が言いました。

「これ、直丸。そんなことをいうものじゃありません。」美津はあわてて直丸に言いました。

「これはどういうお話ですか。」次郎吉が目を輝かせて聞くと、美津が教えてくれました。

「源平の合戦で、若い平家のおさむらい平敦盛が、十六さいで命を落とすお話ですよ。」

「にんげんじゅうねん、げてんのうちをくらぶれば、ゆめまぼろしの」とくなり。ひとたびせ  
いをうけ、めつせぬものあるべきか…。」



見ている大人達はみんなみだを流し、お話に聞き入っています。次郎吉もなぜか目の前の舞から目がはなせませんでした。

6

「次郎吉、これを西光寺に届けておくれ。この間、殿の使いでうかがつたおりに、おじょう様と俳句の話になつてな、この本をお見せする約束やくそくをしたのだ。」

「はい。」と言つて、次郎吉は出かけていきました。

「ごめんください。」

玄関先げんかんさきで大きな声で呼ぶと、戸が開いて、寺に仕える男が顔を出しました。

「杉森信義の次男、次郎吉です。父の使い

で、この本をおしょう様にお届けにあがりました。」

「そんなら、ちょいとお待ちを。」と言つて、男は奥へ引っ込みました。

しばらくすると上品そうな女人が出てきました。「おとく様だ。」と次郎吉は思いました。

「お待たせしてごめんなさい。次郎吉さんですね。」

「はい。」

「この間、お父上がお見えになられた時、あなたのこともお話になられたのよ。お芝居やご本を読むのが好きだとか。」

「はい、けん術のけいこより好きです。」

おとくはくすくすと笑いだし、「そうですか。どうぞ中へお上がりなさい。あなたに、お見せしたいものがありますから。」と言つて、次郎吉を家の中に招き入れました。

奥の部屋には、大きな書だなが置かれ、ぎっしり本が並んでいました。

「次郎吉さん、これは何の本だか分かりますか。」

「へいけものがたり、あつ、敦盛が出てくる本ですね。」

「よくござんじですね。」

「いえ、平家というから、敦盛も出てくるのかと…。その下のたなに並んでいる本は。」

「ああ、これは、げんじ ものがたり源氏物語げんじ ものがたりです。」

「げんじ…あつ、牛若丸や弁慶が出てくる本ですか。」

「いいえ、これは、光源氏ひかるげんじという皇子の恋のお話なのですよ。」

「皇子は、鯉こいを飼かっていたのですか。」

「ほほほほ。お魚の鯉ではなく、相手のことをどつても好きになる恋のことです。次郎吉さんが、もう少し大人になつた時、読んでほしい本です。」

そう言うと、おとく様は、少し夢見るような顔になりました。

「にゃあ。」いつの間にか猫がいて、おとく様の足に顔をこすり始めました。

「おや、カンキチ、お腹なかがすいたの。」

「にゃあ。」



次郎吉も、急にお腹がすいてきました。

「まあ、おそらくまで引き留めてしまつて。お父上によろしくお伝えください。」  
「はい。」

帰り道、次郎吉は、「カンキチって、次郎吉の相棒あいぼうみたいだな。」と、ひとり言を言いながら、何だかふわふわした足取りになつていきました。

7



次郎吉が十一さいになつた年の十一月の寒い朝のことです。次郎吉はふとんの中でおとな達があわただしく動きまわる音を聞いて目ざめました。

「まだ二十四さいの若さですって。」

「子どもさんも二人いて、まだお小さいのに…。」

飯めしたきをしているお手つだいの女達が、ひそひそと話をしているのが聞こえました。

「母上、何かあつたのですか。」

「西光寺のおく様が急にお亡くなりになつたのよ。」

「え、おとく様が。」

「今から父上はおそう式の準備じゅんびで出かけます。次郎吉、あなたも早く着がえて、朝あさごはんをすませ



なさい。」

翌日、西光寺でおとくのおそう式が行われました。

暗い空からは、時折、雪が舞いおりました。

おそう式は、殿様もお出ましになる大きなものでした。たくさんのおばう様が集まり、お経をあげています。やがてお経の声がやむと、おそう式の行列がお寺の門から出てきました。

吉江の里に住む者は、みんな通りに出でています。次郎吉もその中のひとりでした。

行列が通りのまん中をゆっくりと進んでいきます。

「なんでおとく様が。なんまんだぶ、なんまんだぶ。」

となりに立っていた見知らぬおばあさんがつぶやきました。

「なんで……なんで……。」

次郎吉も行列に手を合わせ、同じ言葉を口の中でつぶやくほがありました。



8

年が明けて、また春がやってきました。

気候<sup>こう</sup>が良くなつてからといふもの、次郎吉は七曲りを通り、よく西光寺を訪れていました。特に用事はないのですが、きれいにはき清められた境内でしばしの時を過ごしていました。

この日、次郎吉は、いつもするように大いちようの木の下にぼんやりとすわっていると、いつかの寺に仕える男がやってきて、お寺の玄関の方にまわるようになると、と言いました。

「何の用事だらう。」ここころあたりのない次郎吉ですが、言われたとおりになると、中から若い武士が出てきました。

「このところよく見かけるので寺男に聞いてみたのだが、杉森次郎吉とは確かにおぬしか。」

「はい。私が杉森次郎吉です。」

「わしはおとくの弟で、浦上十左衛門<sup>うらがみじやうざえもん</sup>と申す。縁あって、この

春から吉江藩に仕えることになった。先日、姉のかたみの品を整理してたら、この包みが出てきた。『次郎吉殿へおわたしするよう』との手紙がついている。おぬし、なにかおぼえは。』

そう言われても次郎吉は何のことかわからず、だまつて立ちつくすだけでした。

「にやあ。」いつのまにか、猫のカンキチがやって来て、風呂敷のはしをくわえ引っ張りだしました。次郎吉にはまるで「開けてみろ、相棒。」と言っているかのように見えました。

「中を見てもよろしいですか。」次郎吉が十左衛門に断って風呂敷をほどくと、中から『源氏物語』の本が出てきました。あまりに思いがけないことに次郎吉は声も出ませんでした。

「せっかくの姉の願いじや。よつて次郎吉、これをおぬしに渡したいと思う。』

「ありがとうございます。』次郎吉はカンキチの頭をなでながら、「カンキチ、おまえもありがとう。』と心の中で言いました。そして包みをかかえると家へと走つて帰りました。

9

それからしばらくして、杉森家に大きな事件がおきました。

とつ然、父が吉江藩をやめることになったのです。くわしい理由は、次郎吉にはわかりませんでしたが、これ以上、吉江の里に住むことはできなくなりました。

一家は、まずは京に行く計画をたてました。兄の市三郎は、そこで武士として勤める先を探す

つもりです。弟の金三郎は医者の仕事に興味きょうみがあり、父が養子ようしに行く先を探すこととなりました。ある朝父が、まだ進む道が決まっていなかつた次郎吉を、座ざしきによびました。

「次郎吉、お前はどうしたいのだ。」

実は次郎吉には、少し前から心に決めていたことがありました。

「わたしは京で、もつと学びたいと思います。」

「学問か…そうじゃな。お前は本を読むのが好きだから、それも良いだろう。」

その日の午後、春慶寺で、次郎吉は直丸と待ち合わせをしました。境内の木々が青々と葉っぱを付け始め、それが初夏しょかの風を受けきらきらと光っています。

「直丸、わたしも家族といっしょに京に行こうと思うんだ。」

「そうか。決めたのか。さびしくなるな。」

「京で何ができるかは、まだわからないけれど。」

「おれは次男だが武士になるつもりだ。そのためにもつともつとけん術をがんばらないとな。」

「ああ、直丸ならきっと吉江藩よしおはん一のけんごうになるよ。がんばれよ。」

「次郎吉もな。」

二人はしばらくの間、無言で目の前の木々を見つめていました。

一家が吉江の里をはなれる日、次郎吉は、はす池のふちに座つていました。水の中から、はすの丸い大きな葉っぱがたくさん立ち上がっています。にぎやかな吉江の町の中でも、ここだけは静しづかでひつそりとしていました。

ひざの上には、『源氏物語』が乗つていました。

「次郎吉さん、もう少し大人になつたとき、読んでほしい本です。」  
はすの葉をゆらす風の音にまじつて、ふと、おとくの声が聞こえたような気がしました。

次郎吉の心には、「おとく様が住んでいたという京を、この目で見てみたい。」というまだ見ぬ京へのあこがれが強くわいてくるのでした。

そこで自分がやりたいことがきっと見つかる気がして、次郎吉は両手のこぶしをぎゅっとぎりしめました。



# 「近松の里 たちまち」を歩いてみませんか。



① 近松門左衛門記念碑庭園

庭園には三昧線の形の石像があり、近松の辞世文を記した石碑が建っています。公民館内の「近松の里めぐり情報館」には近松関連の資料が展示がされています。



② 西光寺

西光寺の表門は、吉江藩主だった松平昌親公が福井藩主を継ぐこととなり、藩主となった吉江藩の門を移したものと伝えられています。



③ 福正寺

創建は1866年で、吉江藩ができる前からこの地に建っていました。昌親公より材木を寄贈された記録もあり、幼少の近松が境内で元気にお遊びいたかもしません。



④ 吉江七曲り通り

吉江藩2万5千石の城下町の面影が残る、吉江七曲り通り。一年を通して趣がありますが、春には桜の花で彩られ、美しい風情を醸します。



⑤ 吉江藩跡館

吉江藩は兄の福井藩主光通公の死去により、昌親公が福井藩主になったためわずか30年足らずで廃藩になりました。現在は藩跡館に石碑が建っています。



⑥ 近松門左衛門坐像

吉江で生まれた近松は越前吉江の豊かな自然と人情、風情に育まれたといえます。浅水川沿いの見晴らしの良い場所に近松の坐像はどっしりと鎮座しています。



⑦ 春慶寺

吉江藩成立後、昌親公の篤い信仰のものと、同藩の祈願所に定められました。近松幼少の頃この寺の一角を借り、家族で住んでいたといわれています。



⑧ 横お清水

千古の昔より涸れることなく健康長寿の水として親しまれ、昌親公や家族の家族、村人たちの喉を潤してきました。近松もこの水で温泉を使ったといわれています。

# 近松門左衛門略年表

歳は数え年で記載

慶長5年(1600)	関ヶ原合戦。
慶長6年(1601)	結城(のちに松平)秀康、北庄へ入部。
慶長8年(1603)	江戸幕府成立。
正保2年(1645)	三代福井藩主忠昌死去。側室の子、千菊・福松への分知決定。
慶安元年(1648)	福松の在所が吉江(現鯖江市)に決まる。
慶安4年(1651)	福松が元服。兵部大輔昌親と名乗る。
承応2年(1653)(以前)	昌親の家臣団が吉江に移住。城下町の普請が行われる。
承応2年(1653)	近松、吉江の地に生まれる。
明暦元年(1655)	昌親が、江戸より吉江の地に入る。
寛文4年(1664)(以降)	父信義が浪人し、一家は京都へ移住。近松、公家に仕える。
延宝2年(1674)	昌親が福井藩を継ぐことになり、吉江藩は福井藩に吸収合併。
天和3年(1683)	『世継曾我』。確実作の最も早いもの。
元禄16年(1703)	『曾根崎心中』。近松最初の世話淨瑠璃。大当たり。
宝永3年(1706)	京都から大坂に移住する。
正徳5年(1715)	『国性爺合戦』。三年越しの大当たり。
享保9年(1724)	11月22日、死去。享年72歳。



親類書  
(鯖江市まなべの館寄託)



杉森家系譜  
(鯖江市まなべの館寄託)



西光寺文書  
(西光寺蔵)

発行 鯖江市教育委員会文化課

〒916-0024 福井県鯖江市長泉寺町1丁目9-20

TEL 0778-51-5999 FAX 0778-54-7123

E-mail SC-Bunka@city.sabae.lg.jp

編集 さばえ近松倶楽部

林 哲 治  
橋 本 和 久  
栗 田 明 美  
桑 原 文 子  
若 竹 健 治

2018年2月1日発行

この書籍の原稿は、提案型市民民主役事業「近松が生まれたまち発信事業」の一環として、さばえ近松倶楽部が鯖江市から委託されて作成しました。

